
バカとテストと召喚獣 明久の妹は大自然の友

ナハト・リコリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 明久の妹は大自然の友

【Nコード】

N4844S

【作者名】

ナハト・リコリス

【あらすじ】

神の暇つぶしに選ばれて転生して存在がバカとテストの世界で巻き起こすドラバタ話。

主人公は吉井明久の妹『吉井桃香』で、彼女は『自然の声』を聞くことのできる人間で、さらには五人に分身ができる。そしていつも手に持っているものはヨーヨーと変わっている。

そして兄である明久が大好きなブラコン妹である。

そんな妹とバカテストメンバーが繰り広げるときにバトル有り、ときに笑い有りの物語が今始まる。

ただ作者の文才は低いのであまり期待しないでください。

プロローグ（前書き）

ISができていないのに新作です。

というよりも設定ができてしまったので怒らないでください。

プロローグ

「ふ・ざ・け・る・な〜!!」

周りが真っ白の何も無い空間で、俺は目の前にいる20くらいの男性に向かって叫んだ。

俺は最近やっていた仕事を止め、新しい仕事を探そうとハロー〇ークに行った。

運転免許を持っているが車を持っていない俺は、自転車で向かった後、仕事が見つからず、

そのまま家に帰ろうといつもの道で帰っていたら突如落石がおきて俺は死んでしまった。

そしてこの場所に来たのだが、俺の目の前にいる神と名乗る男が俺におきた事故の顛末を話してくれた。

本人曰く、『暇潰しに付き合っしてほしいから』という理由で、俺は世界中の中から選ばれた人間で、しかもあの落石もそのためにおきたものらしいのだ。

そして俺は冒頭に至るのだが・・・。

「まあ、いいじゃないか。僕の暇潰しに付き合ってくれたら君が行きたい世界に転生させてあげるからさ」

「ふざけんな。さっさと俺を元の世界に返せ!! 神様だろうが何だろうが人の命で遊ぶな!!」

「無理だよ。君の身体は落石でぐちゃぐちゃ。おまけに君を元の世界に送って、別の存在に生まれ変わらすことも出来ないって言う決まりがあるからねえ」

「な、なんだよそれ！それじゃ俺はお前の暇潰しに付き合わないといけないのか？」

「そ、だからさ、さっさと決めてくれないかい。特殊能力とかも色々付けてあげるからさ」

俺はそんなのに付き合わないと言うと、俺という魂を消滅させると脅された。どうゆう事かと聞くと、俺は新たに生まれ変わる事すら出来なくなるといわれたので、そんな事になりたくない俺は仕方なくこの神と呼ばれる存在の暇潰しに付き合うために、行って見たい世界を考えたのだが、5つも行きたい世界があるので決めるのが難しく、それで神に頼んでサイコロを作ってもらった。

ちなみに俺が行きたい世界は

1. リリカルなのはの世界
2. NARUTOの世界
3. バカとテストと召喚獣の世界
4. ゼロの使い魔の世界
5. 遊戯王の世界

だったのだが、最後の一つはこの俺をここに呼び込んだ神に決めて

もらうことにし、それだけ『当』と描かれた面になり、他の面は俺の言った世界の名前が書かれているサイコロができた。

ちなみにだが、このサイコロには神が一切の手を加えないと言った品物であるため、必然的に俺の運によるものとなっている。

（わかりやすいえばごきげん〇うのサイコロです）

「しかし、サイコロで君の行く世界を決めるなんて、君もおかしな人間だね」

「いいだろうが、それにこっちのほうが面白いし、神様であるあんたが選んだ世界ってのもあるからな。

それと確か特殊能力もこれで行く世界が決まってから言うから、それでいいな」

「ああいいよ。さて、そのサイコロを振ってもらおう。君が行く世界を」

そしてサイコロの目は『バカとテストと召喚獣』の目にとまった。

「バカとテストと召喚獣の世界。略してバカテス。はい、皆さん一緒に」

「君ね、ここには僕と君しかないんだからそんなのできるわけないだろ」

神はのってくれなかった。一応俺の記憶で覚えている元ネタ的にやってみたのにこれって……。

「しかしその世界となると彼らとの『契約』がうまくいかないなあ」
「契約？ なんだよそれ」

神が変な事を言ったので聞いてみると、もしも俺が選んだ世界がバカテス以外なら、神が選んだ存在と悪魔側が選んだ存在とを交戦させてその人生を見るというものだったらしいのだが、このバカテス世界は元々が笑えるような状況が多いらしく、そのため神々や悪魔達の選んだ存在同士を交戦させることができない世界のひとつらしいのだ。

「けどまあ、君がこの世界を選んだのだから文句は言えないね。たとえその方法がサイコロであってもね。それじゃあ能力を言ってくれ」

「だったらまず最初に俺の頭を、努力すれば文月学園の教師位の点数を出せるようにしてくれ」

「いいのかい？ そんな事をしなくても君の頭を天才にできるんだよ？ いちいち秀才にならなくてもいいのに？」

「俺は自分の手で頭を良くしたいんだよ。それとだけどさ、俺の記憶を全て消してくれるか？ ちょっと条件あるんだけど」

「条件？ 一体なんなんだい？」

「簡単に言うとき俺の産まれる転生先なんだけど、主人公の吉井明久か、その悪友である坂本雄二の双子の妹にしてほしいんだ」

「なんで女になるんだい？ 一応君男だろ」

「だからさ。バカテス世界の世界なら面白い事が多いし、それに転生するなら女の子にもなってもいいかなって、思ってた」

そう言ったら神は納得してくれた。そしてその条件の内容はよくクイズ等に出される壁を突き破ったのもので、正解したら坂本のところ、間違えたら吉井のところ、しかもどちらになっても二卵性の双子の女の子としての生活になる。

ちなみにだが、どちらに転生しても今の『俺』としての記憶は消してもらおう事にしてもらった。

正確には『男』としての記憶が無いだけで、それ以外で俺を形成してきた記憶がうっすらと残っているようなものにしてもらった。『女』になるのに『男』の記憶を持っていると後々大変そうだからだ。

「それと能力とかの方面だけど、俺が昔読んでた少女マンガで『超少女明日香』ってのがあって、その主人公の『砂姫明日香』（さあすか）と同じ能力をくれないか？ ついでに言うとおの一種のチートの的な掃除能力とかの家事能力付で」

「結構マイナーな物を選ぶね。まあいいよ。ってことは五人に分身できるし、色々と自然の力が借りれるよ。まあそのかわり主人公の砂姫明日香と似た容姿になるけどいいの？ おまけに彼女の苦手な物が出たら同じ症状になるよ」

「あ、だったら顔とか部分だけ『真・恋姫無双』に出てきた『桃香』にしてくれ。胸はバカテスの霧島翔子と同じで、変化したら一回り大きくなる程度にしてくれ。それと能力のほうはそっちが決めた一定の歳になったら得るようにしてくれ」

「わかった。その程度ならいいだろう」

そして俺の目の前に椅子が用意され、その椅子に座った。俺は最後の学歴が高校卒業なのだが、成績は当時卒業生徒数600人中下から50番目という成績なので、相当頭が悪いので、出してもらう問題は○×問題にもらった。

ちなみにだが、胸のサイズに関しては俺自身知らないのです、その辺は適当にしてもらっておいた。

「それじゃ問題。東京都千代田区霞ヶ関1-1-1、この番号はTV番組で使用された住所である。○か×か？」

そして俺は間違いだと思い勢いよく走って『×』に飛び込んだ。そして答えは……

「なんで落とし穴なんだ」 「正解は○。君の好きだった特撮シリーズで、『ウルトラマンタロウ』の『ZAT本部』の住所だったのに」

「そんなの知るか……!!」

そして椅子ごと奈落の底に俺は落ちて行った。

そして神は彼の言った設定道理にし、そして神は娯楽であるこの選ばれた存在の人生を見ることにした。

そして彼から彼女に代わった存在が、周りと一緒にどのような事態を引き出すのか心待ちにしながら……。

プロローグ（後書き）

こんなのでいいかな？

しかし、超少女明日香を知っている人っているのかな？

プロローグ？（前書き）

プロローグの二話目です。
ではどうぞ。

プロローグ？

「（これが振り分け試験か、クラス代表は面倒だから少し細工して
つと）」

私『吉井桃香』は兄である『吉井明久』が大好きな妹です。物凄いくらいバカだけど優しいお兄ちゃん、私の自慢できる兄ですが、この学園に入学する際の振り分けで私はAクラス、兄はDクラスでした。

そのため放課後にお兄ちゃん分を補給しに何回も兄のいる教室に足を運びましたし、この一年間のテストで最初は本気を出しましたが、後は兄と一緒に入れるだろうクラスの点数を見極めるために色々と試行錯誤したのです。

ですが最初にたたき出したテストの総合点数が原因で私はいらない称号を貰うはめになりましたけれど、仕方ないですよ。何しろ学園長が私を脅したんです。しかも本気で試験受けないと兄と一緒に退学って言われたんですよ。

今のご時勢で高校を退学になったら将来の進路に色々と支障をきたすし、兄まで巻き込みたくなかったので、仕方なく本気で試験を受けるはめになりましたけれど、今思い出しただけでもムカつきます。

けれどこの振り分け試験は違います。何しろ兄と一緒に『A』でいられる可能性が高いからです。

今までの兄を知っている人なら確実に無理と言うでしょうが、この私が心を鬼にして兄に猛勉強させたのです。

そしてその結果私の出した問題集での総合点数を考えれば『A』に入れること間違い無しなのです。

そして同時に兄が『A』になったら兄が持つ『不名誉』の称号すら消してくれるように学園長にお願いしてあるので大丈夫。

そして私は最初の試験を兄と同じ教室で受けていたのですが、噂では難しいと評判でしたがこれなら何とか全問正解できますが、正解するのを一部調整していて……

ドサッ！

そんな音がしたので私が音がした方を見ると、同じクラスである『姫路瑞希』ちゃんが倒れていました。

顔を赤く、私は彼女が熱にうなされている事に気づきました。私は昔は体が弱く、そのたびに熱を出して体を壊してお兄ちゃんを困らせていたからです。

そして倒れた瑞希ちゃんをお兄ちゃんが声をかけていました。

「姫路さん大丈夫？ 姫路さん」

「試験途中での退席は『無得点扱い』になるが、それでもいいか？」

「ちょ、ちょっと先生！ 病気じゃしょうがないじゃないですか」

「なら君も出て行くかい。君も『無得点扱い』になるがね」
「……いいですよ」

そしてお兄ちゃんは瑞希さんを連れて教室から退席しました。私はこの瞬間お兄ちゃんが『A』になれない事は確定してしまいました。ですがそれでも

「（お兄ちゃんらしいな。相変わらず優しいんだから。それにして

も瑞希ちゃん、お姫様抱っこっていいなあ」

どうせ兄のことですし、次のテストには帰ってくるはずだと思い残りの回答を埋めていたのですが…。

「まったくあの吉井のバカは、何を考えてるんだ。まあこの学園一のバカらしいと言えればバカらしいか」

カチン。

私はこの言葉を聴いて流石に切れました。そして私は席を立て先生の前に行きました。

そしてスカートのポケットの中に入れてある『ある物』を手に装備しておいて席を立ったのです。

「何だお前も『ヒュン』ぐはっ」 ドゴン

「教師の癖に病気の人間を運んでいった人間をバカにするなんて、教師以前に人間と恥ずかしくないんですか！」

私はポケットの中に入れていたヨーヨーを先生の顔面に命中させ、怯ませた後に近づいておもいきり捻って倒してやりました。

私はそれで少しは気分が良くなったのですが、これ以上テストを受けるつもりもないのでそのまま退席し、兄と瑞希ちゃんがいるであろう保健室に向かって歩いて行きました。

途中で西村先生、生徒の間では『鉄人』と呼ばれている先生に呼び止められましたが、私は簡単に事情を言って保健室に行きました。保健室について私は一時的にお兄ちゃんに出て行ってもらい、瑞希ちゃんの体を拭いたりしておきました。

ちなみに兄にワザと『F』になるように点数を調整するように言っ
て私は全てのテストに参加しないで、瑞希ちゃんの看病に徹してお
きました。お兄ちゃんが色々言ってきたのですが、女の子のことは
女の子でしか判らないと言って教室に戻ってテストを受けてもらい
ました。

それでもお兄ちゃんには瑞希ちゃんが安定するまで三時間目のテス
トが終わった後で教室に行ってもらうようにしてもらいましたけれ
ど。

そして振り分け試験の日から月日は流れて、桜が咲き誇る二年生に
なつての最初の新学期が始まります。

プロローグ？（後書き）

さて次回はクラスの決定とクラスの状況を見るの、少しオリジナルを入れる予定です。

その理由は超少女明日香を知っている人ならすぐにわかります

人物・召喚獣設定（前書き）

人物設定と召喚獣の設定です。
それともうひとつの称号も書いてあります。

人物・召喚獣設定

吉井 桃香 よしい としのか 15

CV 後藤 麻衣 (真・恋姫の劉備の声優)

二年Fクラス所属 観察処分者兼特別クラス観察者

明久の二卵性の双子の妹で、頭は全科目教師並の点数をたたき出せるほどの存在。

容姿は真・恋姫の劉備を黒髪にして、『超少女明日香』に出てくる主人公『砂姫明日香』の普通のちんくしゃな容姿と似た姿になっており、そのためいつも自身の髪で目の部分が相手に見えない。

目が見えると状態に変化すると、胸が少しだけ大きくなり、美人になるのだが、滅多な事ではない。

(胸のサイズはわからないので通常は霧島翔子並で、変身すると一回り大きくなる)

小学校時代に容姿と体が弱いことを理由に苛められていたが、その度に兄の明久に助けられた。

そのためか極度のブラコンで、兄である明久なら自分の全て奉げるくらいの女の子だが、明久本人が嫌がるようなことはしないという性格で、もしも明久に彼女ができたら身をひこうとも思っている。

現在その候補として友人でもある『姫路瑞希』が入っているが、本人は彼女でよいのか迷っている。

明久に暴力などを振るう者には絶対に容赦無しで、たとえ相手が友人であってもその友人が『いない者』として扱うこともある。また幼少期に知り合いの家で過した時に、病気になってしまい、水を飲むとうと台所に行ったら黒光りするGが顔面についた挙句に、大量に

出てきて襲われた過去を持っているため、そのためGを見た瞬間泡を吹いて気絶する。

料理は明久よりもうまく、家事全般は物凄いくらい得意で、絶対に黒光りするGが出てこない。

（どれだけ家事全般が凄いかと言うと、元にした主人公並に恐ろしいほどのチートのな性能）

特技はヨーヨーで、いつもポケットに一個は必ず持っている。腕前はプロ級で、投げたボールを打ち落とすほど上手い。

また兄である明久に暴行を加えようとする輩は誰であろうと許さない口で、そのため島田美波は一番嫌いである。

観察処分者なのは振り分け試験のときに試験官である先生をヨーヨーで殴った後、暴行したためである。

また、転生する前に神に頼んだ『超少女明日香』にでてくる主人公『砂姫明日香』のもつ自然の力を借りられる能力を持ち、色々と不思議な現象を起こすことができる。また、原作の明日香のように五人に分身ができるうえに、超能力による攻撃（発火能力など）が一切効かない。本人は風の力を借りることが多い。ちなみにこの力が覚醒したのは小学校高学年の時で、同時に体の弱いのは直ったが、容姿は変化しなかった。

また相棒でもあるミックという猫がいて、この猫もいつもは不細工な猫だが、変身できる。

猫の癖に結構強く、暴走したFFF団全員を一人（匹？）で倒せるほどの腕で、いつもは鉄人の家にいる。

たまに二本足で歩いたり、お世話になっている鉄人の仕事を色々と手伝ったりもするという不思議な猫である。

（理由は住んでいる所がアパートなので動物を飼えないだけ。学校にも平然と鉄人と一緒に来ている）

明久と一緒に暮らしているので、家の電気・水道・ガスが止まっているということはないが、兄の浪費癖を本人に判らすために、食費は自分持ちになっているのだが、未だに明久は砂糖と塩と水だけで生きている。

たまに明久にご飯をあげている。

特技　　ヨーヨー・家事全般

好きな物・人　兄・兄の作った料理・兄の笑顔・ケーキ・大自然の
息吹・ミック

嫌いな物・人　兄に暴行する人（島田美波など）・自然を壊す者達・
黒光りするG

もうひとつの称号である特別クラス観察者とは、入学試験時に教師並の点数をたたき出し、その後Aクラス内でB～Fクラス並という点数を出す桃香に不審を抱いた学園長が本人呼び出し、脅迫して特別補習試験を受けさせたのだ。

その結果全教科の点数が教師並だったので与えられた称号。

特別クラス観察者は、教師・全校生徒内において、文月学園の不利益や学校自体を閉校にさせる存在を取り締まる存在。

簡単に言えば文月学園内限定の特殊警察官である。事態状況によっては鉄人との連携で事態の終息に尽力する。

ちなみにだが、この存在を知っているのは学園長と学年主任、そして鉄人の三人だけで他の教師や生徒には知られていない。

この称号を持つため本来なら教師のみが出せる召喚フィールドの展

開が可能であるが、事前に処罰対象を学園長か学年主任、または鉄人に了承してもらっていないと使用できない。本人が勝手に展開することは禁じられている。

また特別クラス観察者の展開できるフィールドは、処罰対象の教師・生徒の召喚獣を『観察処分者』扱いとする性質を持つ。

また同時に新技術の指輪などの稼動実験にも参加しているが、あまり学校の裏事情は家族である明久や友人達にも一切言っていない。

召喚獣設定

召喚獣は文月学園の制服ではなく、スカートの付いた白の女子制服で、スカートはロングスカートになっている。

両手に赤い手甲に額にヘアバンドのような額宛をつけ、スカートの両ポケットにはヨーヨーが一つずつあり、両手で使用する事もある。またヨーヨーの糸の部分は玉状の鎖になっていて、相手を拘束することもできる。

ヨーヨー本体は超合金できているのか、一部の召喚獣の持つ武器（ランスや刀等）を防ぐ防具にもなっている。
ちなみにだが、ちんくしゃ状態と変身状態の二つがある

指輪 『風』

相手の召喚獣を風で拘束したり、武器のヨーヨーや相手や持っている武器を吹き飛ばしたりする。

指輪能力使用消費点数

拘束 『50 (+30)』 拘束対象が複数いた場合はプラス分消費していく。

吹き飛ばし 『50 (+10)50)』 ヨーヨーのときは消費は50だが、ヨーヨー以外は物によって変化する

人物・召喚獣設定（後書き）

どうでしょうかこの設定は。

それと主人公がどれだけチートなのかは元にした『超少女明日香』を調べると解ります。

作者もこのチート性能には作品を何度読み返しても驚きます。

第一話（前書き）

第一話ですが、まだFクラスには行きません。
それと後々の布石を出しておきました。

第一話

「吉井兄妹、遅刻だぞ」 「ニャー」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見るとそこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。そしてその肩にはものすごく不細工な猫がいた。

「げ、鉄人」 「お兄ちゃん失礼だよ。おはようございます西村先生。ミックもおはよう」

「吉井兄、西村先生と呼べ。それと吉井妹、おはよう」

この人はこの文月学園で生活指導の鬼と呼ばれている西村先生。生徒の間では『鉄人』と呼ばれています。

『鉄人』の名前の理由はこの先生の趣味がトライアスロンであるということ、真冬でも半袖でいるも理由のひとつです。

そしてこの先生の肩にいるのは私の愛猫『ミック』なのですが、私の家がアパートなので動物は飼えないので、西村先生に預かって飼ってもらっているのです。

そのためミックは西村先生といつも一緒にいるので、西村先生用のマスコットとして扱われているそうです。

「まあいい、お前達で最後だ」

そして私達は西村先生から自分の名前の書かれた茶封筒を渡されました。この中に1年間お世話になるクラスが書かれています。普通なら掲示板にでも書いて置けばいいのですが、私達が通う文月学園は世界的にも注目されている特殊システムを導入している試験

校で、そのためこのような変わったほう方法でクラスが教えられるのです。

『F』

私達兄妹はこの学園の最低学年クラスの編入が決まりました。まあ狙ってやったのですが、私の封筒にはもう一枚紙が入ってありました。

「吉井妹、お前に関してはすまなかったな。お前から話を聞いていたので、俺個人としてはさせたくなかったのだが」

「いいんですよ。それに私はお兄ちゃんと一緒ならそれでいいですから」 「桃香、それって」

「吉井桃香、下記の者『観察処分者』に処する 文月学園 学園長 藤堂カヲル」

「ちょ、なんで桃香が」 「いいですよお兄ちゃん。それに見合う事をしてしまいましたから」

お兄ちゃんには私がやったことを話していない。兄には色々と隠し事をしている。

その理由の大半は『私の戦いに兄を巻き込みたく無い』という、強い思いだ。兄は優しすぎるので、絶対に私のやっていることに首を突っ込んでくる。そしていつか私が『兄を殺してしまう』。

私は『人殺し』なのだから…。

そう、『能力』^{ちから}があっても救うことすら出来ずに、『あの人達』を

見殺しにした私は人殺しなのだから。

そして自分だけのうのうと今も生きているのだ。あの『悲しい思いがある場所』からこの場所に帰ってきたのだから。

ミックがないたので私は元に戻しましたが、お兄ちゃんにも西村先生にも私の様子で迷惑をかけましたが、西村先生にお礼を言っただけは学校に入ろうとしたのですが

「吉井兄、ちょっと来い」 「え、は、はい」 「お兄ちゃん？」

「吉井妹は先に行っていてくれ。何、すぐに話は終わる」 「はあ、わかりました」

私はそういつて下駄箱まで移動していきました。何の話をするのかわかりませんが、それでも私は能力を使って聞く気にはなりませんでした。

僕は鉄人に呼び止められたので、なぜだろうと思った。

「吉井、お前が猛勉強したのは俺も知っているし、そして振り分け試験のことも妹から聞いてある」

「先生、それでも僕はあのまま戻る気にはなれませんでしたから」

「実を言うとな吉井、お前が振り分け試験の結果でAクラスになったら、お前の持っている『観察処分者』の称号を取り消すように、お前の妹が学園長に直談判したんだ」

「えっ、そんなこと桃香は一言も、そりゃあ僕が観察処分者の称号を貰って、三日目からのすごい位のスパルタで勉強を教えてくれましたけれど、そうかそれで桃香はあんなにも僕に勉強を教えてくれたんだ」

僕は知らなかった。まさか妹がそんなことをしていたなんてことも、そしてそんな約束をしていたことすら知らなかったのだ。

「俺も口止めされていたからな。何しろ俺を証人として学園長室に連れて行って、軽く三時間も話し合っていたからな」

「そ、そんなにも長い時間を、僕はやっぱりダメな兄ですね」

「まあいい、それがわかっていれば上出来だ。それとな吉井、先生はお前のした行為は悪いと思っているが個人的には良い事をしたと思っている」

まさか鉄人からそのような事を言われるとは思ってもみなかったが、それでも僕は自分のした行為が間違っていないといえると思えてよかった。

そして僕は桃香がいるであろう下駄箱に向かって走っていった。

「それにしてもAクラスは凄かったね」「そうですね。いくらこの学校が学力主義とはいえ、設備が凄かったですね」

お兄ちゃんと合流した私は一緒にFクラスに行こうとしたのですが、Aクラスを見てから行こうと言う兄の言葉に了承し、見に行ったのですが、その設備に唖然としました。

二年生の教室は3FなのでAクラスを見ようと思ったらに簡単に見えるのですが、まずその広さに驚きました。

まず広さは普通の教室の五倍もある教室で、黒板はなく、あるのは大型のプラズマディスプレイでした。

次に個人一人一人にノートパソコンにエアコン、冷蔵庫にリクライニングシート、さらにシステムデスクにフリードリンクバー、最後にお菓子食べ放題と、学校の設備というよりもどこかの高級ホテルの一室かロビーのような感じが漂う教室でした。

おまけに『2-A』と書かれたプレートももの凄く高級感が漂っていたので、同じ学費でここまで差がつくものなのかと思ったくらいです。

そして私達兄妹は自分達の編入する最低クラスである『F』クラスに向かいました。

第一話（後書き）

桃香の隠している秘密である場所がありますが、これは原作の明日香であつたある場所です。

ちなみにですが、その場所は一般人もいけない上に、その場所で行われた事は原作であつた行為ではありませんが、この行為をする人間がいたら外道以外の何者でもありません。

たとえばそれが人ではない者に操られていてもです。

第二話（前書き）

連続投稿です。

しかしなぜかISよりも話が多く出てきます。何故だろう？

第二話

「これがFクラス」 「なんかとんでもないですね」

私達兄妹は自分達がお世話になるクラスに来たのですが、2－Fと書かれたプレートは木製なのですが、半分に割れていました。そしてその扉も木製なのですが、相当古いものでした。

完全に言って廃屋の前に立っているというのが私達二人の心境でした。

おまけに言えば私達は遅刻をしてしまったので、クラスメートと仲良くなれるか心配でしたが、意を決して私が先に扉を開けました。

「すみません、遅れてしまいました」 「早く座れ！このウジ虫や
…」

「お兄ちゃん、私、ウジ虫何て、言われました（大泣）」 「いや
待『雄二』（怒）』ま、待て明久」

扉を開けた瞬間ウジ虫呼ばわりされたのでお兄ちゃんに泣きつきま
した。そしてお兄ちゃんも切れて私をウジ虫発言した人に向かって
殴りに行きました。

その相手を見てみると兄の去年のクラスメートにして悪友、何度か
家に遊びに来ている『坂本雄二』君でした。

そして暴行を止めた後に、事情を聞くとまだ先生が来ていないので
クラス代表の自分が教壇に立っていたらしいです。

ですが、教室内を見てみると明かりは裸電球で、床は畳、椅子は無
く座布団が配備され、そして机はちゃぶ台でした。

完全に言って廃屋と言ったほうがいいような教室でありました。Aクラスの設備を見た後ではFクラスの設備はこれで同じ学費を払っている者同士の差なのかが分かりませんでした。

そして後ろから覇気の無い声が聞こえて振り向くと、よれよれのシヤツを着て、さえない風体の人がやってきました。

この人が教師であるということが分かったのですが、私は先生に何処に座るのか聞いてみたら、その席すら決まっていませんでした。仕方が無いので私達は空いている席に座りました。ちなみに私はお兄ちゃんの後ろの席に座りました。

そして先生が教壇に上がりました。

「えー、おはようございます。2年Fクラス担任の福原慎ふくはらしんです。よろしく願います」

黒板に名前を書こうとしたのですが、やめました。これによってこのFクラスにはチョークすらともに置かれていない事がわかりました。

そして50人ばかりがいるFクラスの設備に不備が無いかと先生が聞いたところ、座布団の綿が無い、ちゃぶ台の足が折れている、隙間風がふいて寒いという苦情の回答全てが、我慢するか、極力自分でどうにかするというものだった。

そして先生が廊下のほうから自己紹介をするようにしました。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

最初は秀吉君でした。去年のお兄ちゃんのクラスメートで、演劇部の所属の期待のホープらしいですが、どうみても女の子と間違えて

しまうので、私もはじめて見た時は男性とは気付かず、男子制服を着ていたのですが、女子が制服を間違えているのではと思ったほどです。

あと私達兄妹と同じ二卵性双生児の弟のほうで、姉のほうの木下優子とは去年クラスメートだったのですが、あまり話はしていません。そして秀吉君の自己紹介が微笑んで終わったのですが、女である私ですら嫉妬してしまうほどの可愛らしさが出ていました。

「……………土屋康太」

次もお兄ちゃんのクラスメートで口数は少ないですが、もの凄いくらい運動神経は高いです。それと彼にはあるあだ名があり、その彼が経営する『商会』には何度か足を運んで色々と注文をしています。そしてやはりこのクラスには私とまだ来てはいませんが『彼女』以外の女子はいないと思っていたのですが…。

「―です。外国育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

と考えていたら女子の声だったのですが、その声に私は聞き覚えがありました。何しろそれは

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

笑顔でお兄ちゃんに手を振っていたのは、島田美波というお兄ちゃんに暴行を振るう人でした。

この人のおかげでお兄ちゃんは私の治療のほかにも色々と接骨院のお世話になりました。そのため接骨院に何度も行ったので顔馴染みになり、色々と先生に言われました。何しろ『綺麗に外されてるね』とか『何処やられたの』とか言われました。

ですから私は彼女、島田美波は大嫌いです。ですのでお兄ちゃんに関する警戒を上げておきました。

その後色々な人が自己紹介をしていき、お兄ちゃんの番になりました。

「吉井明久です。妹の桃香ともどもよろしくお願いします」

そう言ってお兄ちゃんの自己紹介が終わり私の番になりました。

「今さっきお兄ちゃんの吉井明久に言われた吉井桃香です。この一年間お兄ちゃんをバカにしたり暴行したりする人は誰であっても許さないのです。よろしくお願いします。特にM・Sは気をつけてくださいね」

一応忠告はしておきましたが、この容姿なので女の子であるにも関わらず誰にも何も言われませんでした。

その後も名前を告げるだけの単調な作業が続き、お兄ちゃんはいいい加減眠そうにしてみました。が、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れました。

その生徒は私がこのクラスにいると思っていた私以外の（島田さんは最初から除外）女子生徒だからです。

そしてその女子生徒の出現に私とお兄ちゃん以外の全員が驚きました。何しろ彼女は最低クラスであるFクラスに編入してくるという事は誰も思わなかったからです。何しろ彼女の成績はいつも上位クラスに入っていたからです。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

そして彼女に質問した生徒がいました。そして彼女が試験中に熱を出して倒れたからと言うと、その言い訳にこのクラスの言い訳が聞こえてきましたが、私の予想以上に馬鹿げていました。

そして瑞希ちゃんはお兄ちゃんの席の隣に座りました。そしてお兄ちゃんが声をかけようとしたら、坂本君が邪魔しました。

瑞希ちゃんも坂本君は知らなかったので迷っていたら自分の名前を言いました。

そして坂本君が瑞希ちゃんの体調の事を聞くとお兄ちゃんも聞きに行きました。そして私もそれが気になっていたので声を出しました。

「まだ体調は良くないの？」 「瑞希ちゃん、体の調子は大丈夫ですか？」

「よ、吉井君！？それに桃香ちゃんも！？」

私達の顔を見て驚く瑞希ちゃん。けれど一番はまさかお兄ちゃんの席の隣であるということであろうと私は思った。

「姫路。明久がブサイクですまん」

いきなり坂本君がお兄ちゃんを罵倒しましたが、瑞希ちゃんがフオーンとしていたのですが

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

そう坂本君が言った瞬間、私は何か嫌な感じがしたので、お兄ちゃんはその人が誰なのか聞こうと、瑞希ちゃんも聞こうとしたのですが。

「確か、久保ー」 「（何故でしょう、もの凄く嫌な予感が高まってきたのですが）」 「ー利光だったかな」

久保利光 ↓ ♂（性別／オス）

それを聴いた瞬間お兄ちゃんは声を殺してぎめぎめと涙を流しました。そしてそれを聞いた瞬間私は言われた人物との今後の会話が出来ない位の衝撃を受けました。一応お兄ちゃんは女装すればそれなりにみえますが、いくらなんでもこれは酷すぎます。

一応坂本君が半分は冗談だといいましたが、冗談ではないと私は思いました。

そして私達の会話に対して先生が静かにして下さいと教卓をパンパン、と教卓が埃を巻き上げて崩れ落ちました。

それを見た先生は替えを持ってくるといって足早に教室から出て行きました。これを見て私は改めてこの教室の酷さを知りました。

そしてお兄ちゃんが坂本君を連れて廊下に出て行きました。私はお兄ちゃんの考えていることはすぐに分かりました。

瑞希ちゃんのためにこの学園のシステムを利用しての、FクラスがAクラスへの『試召戦争』を起こそうとしている事を。

第二話（後書き）

さて次回は戦争の引き金を引こうと思います。
バカテストは掲載を考え中です。

第三話（前書き）

まさかのPV3000を超えました。

しかし、主人公のチートを知った読者が何を言うのか心配です。
今回は戦争の引き金とDクラスへの宣戦布告です。

第三話

先生が帰ってくる前にお兄ちゃんと坂本君が教室に戻り、そして自己紹介は続いていきました。

そして坂本君の自己紹介になり、クラス代表ということで教壇に立ちました。

ですがいつものふさげた態度は見えず、何かやってくれると言えるような雰囲気を持っていました。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから注目されるわけではない。何しろこのFクラスでのクラス代表というものは、自分達と五十歩百歩とたいして代わりが無いからだ。

「さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方がうまいのか皆が坂本君を見ました。皆の様子を確認した後、この教室の各所を見ていきました。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れたちゃぶ台。

坂本君につられてクラスの全員が坂本君の視線にある調度品に目をやりました。

「Aクラスは冷暖房完備なうえ、座席はリクライニングシートらしいが――不満は無いか？」

「大ありじゃあっ!!」

それは私等の一部の生徒を除いた二年F組生徒の魂の叫びでした。

そして色々出てくるのですが、私からすれば自分の意思で今まで勉強しないでこのクラスに入ったのですから、自業自得だと思うのですが、その事を口に出すつもりはありません。

お兄ちゃんのように頑張っていたのであれば文句は言う必要はありませんが可能性は0でしょうけど。

クラスの級友がさまざまな不満の声を聞き、坂本君は自信に溢れた笑みを浮かべて

「そこでこれは代表としての提案なんだが、FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

この瞬間、Fクラス代表坂本雄二はAクラスに対しての戦争の引き金を引いたのだ。

だがしかし、それを言われたFクラスの面々は現実味の乏しい提案には乗らなかった。

「勝てるわけが無い」 「これ以上設備を落とすたくない」

「姫路さんがいたら何もいらない」

最後だけ違うが、そんな悲鳴が教室から響いた。それほどFクラスとAクラスの戦力差は大きいのだ。

この文月学園には点数の上限がないテストを採用されてから4年間で経過しています。

このテストは一時間内に無制限の問題集が用意されている。その為、テストの点数は上限が無く、

能力次第でどこまでも成績を伸ばす事が可能なのだ。

また、科学とオカルトが偶然により完成された『試験召喚システム』というものがあり、これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能である。

そしてこのシステムを使って生徒に学力の向上のために考案されたのが、召喚獣を使用するのクラス単位の戦争―それが試験召喚戦争なのです。

ちなみにですが、私が勝手に学園長に就けられた称号の名の下に召喚フィールドを展開することは可能ですが、展開対象を事前に学園長か学年主任、もしくは西村先生に報告していないと使用できませんし、この三人しか知らない称号なので誰にも言っていないんですね。

話を戻しますが、Aクラス相手にFクラスのメンバーではほぼいっていいほど、勝てるわけが無いのです。

何しろ選ばれた科目の点数によっては、Aクラスの人間一人に対してFクラスは最低でも三人から四人くらいの戦力が必要です。

相手によれば十人がかりでも勝てない可能性があります。それほど戦力差が大きいのです。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

自信満々に坂本君が言うのですが、誰も信用していません。周りからも否定的な意見が教室に響きます。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろすように見ていく坂本君。そして最初に紹介された土屋康太君、別名『ムツツリーニ』をかわきりに、瑞希ちゃんに秀吉君、そして坂本君本人が名乗りを上げました。

その結果Fクラスの皆の士気は高まったのですが、次の人物で一気に下がりました。

「それに、吉井明久だっている」 しーん

一気に下がりましたね。お兄ちゃんをオチ扱いするとはいい度胸です。ね坂本君。

周りも自己紹介をしたはずなのに忘れてますし、この後の発言次第ではお仕置き決定ですね。

「そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

言ってくれましたね坂本君。お兄ちゃんが気にしていることをお仕置きしておきましょうか。

周りから意味を知って言う人がお兄ちゃんをバカにしました。

本来ならこのような最低クラスに来る瑞希ちゃんは知らないのです

が、去年同じクラスだったので意味は知っています。

「（ビクッ）お前らこれ以上明久をバカにするなよ。死にたいならな。確かに本来なら《観察処分者》の称号を持つ明久は雑魚と言いたいんだが、こいつはそうじゃない。その理由は妹の桃香にある」

急に私の名前を呼びましたね。危険を察知していまさらゴマをする気ですか坂本君？

「こいつの妹である桃香は、あのAクラス代表の霧島翔子を軽く越える点数を叩きだせる人物だからだ。

おまけに明久は最近スパルタで扱かれたせいで、今はAクラス下位クラスの点数を出せるようになっている。

おまけに《観察処分者》として教師の雑用で召喚獣を動かしているから色々細かい行動もできるから、明久は相当強いぞ」

これには私も驚きました。まさかそこまで知っているとは思いませんでした。たしかに霧島さんを抜いて一位になった時はありますが、それも最初のテストのときの一回だけで、後は滅茶苦茶な点数配分だったので、分かるわけないと思っていたからです。

周りも私の名前よりも霧島さんの点数を超えれるとあってさらに期待が高まりました。

まあ容姿が容姿ですのでもありませんが。霧島さんみたいに綺麗じゃないですからね、『今』の姿は。

「坂本君、私はあまり目立ちたくありませんし、それに私も今日付けでお兄ちゃんと同じ《観察処分者》になりましたから」

「マジか。まあいい。これだけの勝てる要素があるんだ。手始めにDクラスを征服してみたいと思う」

そう言って坂本君は征服しようと思っているクラスを言いました。
そして皆も気持ちが高まり、Dクラスを征服しようという気持ちが
高まってきました。

あまりも雰囲気が高かったせいで、瑞希ちゃんが手を上げたのはご
愛嬌ということなのでしょうか？

「明久には悪いがDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無
事大役を果たせ！」

「下位戦力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね」

「大丈夫だ。騙されたと思っていつて来い」

私はミックが教室に来ていたので、お願いしてお兄ちゃんの護衛を
頼んでおきました。可能性がゼロではありませんので

そして数分後

「騙されたあっ！」 「お、早かったな明久」

悪びれも無く坂本君が言うのですが、お兄ちゃんには傷一つついて
いません。坂本君の予想ではお兄ちゃん服が破けるか暴行を加え
られると思ったからだと思います。

本来なら坂本君はお仕置きなのですが、この試験召喚戦争はお兄ち
ゃんも加担しているので、無しにしています。

そしてミックが私の元に帰って来ました。ミックもやれやれといっ
た感じでしたが。

「ミックに助けられたんだよ雄二」 「ミックって鉄人のマスコットの猫か？なるほどな」

坂本君は鉄人のマスコットになっているからミックがいるから暴行が無かったんだろうと思っていてるでしょうが、実際はミックがお兄ちゃんに來た暴行犯を叩きのめしたのです。

さすがのお兄ちゃんも猫に助けられたなんていないのだと思いますしね。

第三話（後書き）

原作でもミックは色々と人を倒しています。

話の中には銃弾すら口に銜えてましたし、他にも色々やっています。

さて次回は戦闘なのですが、できるかな？

第四話（前書き）

色々と原作と違って方向にしています。
戦争は次回の話からです

第四話

さて私達はDクラスへの試験召喚獣戦争のミーティングで屋上に移動しました。

ちなみに、その移動の際に島田さんがお兄ちゃんを暴行するような事を言ったので、ミツクにとっちめてもらいました。

そして屋上にやって来て、お兄ちゃんから今日の午後から開戦することを聞き、お昼にしたのですが…。

「お兄ちゃん、今日はこれね」 「ありがとう桃香」

私はお兄ちゃんにパンを渡しておきました。そして私もお兄ちゃんと同じパンを出して食べました。

今日はお肉の特売日だったのに、戦争があるので行けませんし、少し最悪ではありますが、我慢しておきましょう。

ちなみに食べているのはコンビニで売られているお惣菜パンで、今日はお昼には終わる予定だったのでお弁当を作っていないのです。こんなことなら作っておけばよかったです。

「明久、『今日は』まともな食事だな」 「…うん」 「そうじゃないの？」

「?? ああ、明久君の食事ってそんなにいつもは変なんですか？」

「そうよね？ 私は今まであんた達と一緒に食事した事がないからわからないんだけど、そうなの？」

実を言うと最近のお兄ちゃんの成績が上昇したのはこの食事が関係しているのです。なぜなら

「お兄ちゃんは仕送りのお金の大半を遊びに使用するので、私がお兄ちゃんに出す問題10問の内、解けた数によってお兄ちゃんの食事を変化させてましたからね。ちなみに今回は8問正解でしたよ」

「ほう、すごいじゃないか明久。俺達が知ってるころなんて1問も正解できなくて、水と塩、それに砂糖だけだったもんな」

「そうじゃのう、酷い時には桃香が明久の目の前で弁当を食べるのを見させるという拷問もあったからのお」

「確かに」 「ちよつと皆酷いよ。僕だって、僕だって、生きていくために頑張ったんだよ（泣）」

「桃香ちゃん、それは流石にやり過ぎなんじゃ…」 「そうよ、アキが死ぬわよ」

瑞樹ちゃんとはともかく、島田さんは意外でしたね。けれどお兄ちゃんにしてきた事を考えたら、どうあっても許せませんね。

それに私もちゃんとお兄ちゃんが死なないようにちゃんとしてますよ。

「大丈夫ですよ。たまに当時のお兄ちゃんでも解ける様な簡単な問題もたまに出しておきましたから」

「それでも酷かったぜ。俺が今でも覚えてるので、明久が10日間連続全問不正解のときは一番酷かったじゃねえか？」

「そうですか？そこまで酷くはしてませんよ？」

「いや、あれは拷問じゃろう。あの時はわし等が明久の家に遊びに行っていた時じゃったし、明久に出されたあの献立には目を疑ったものぞ。まさか漫画のネタを見る羽目になるとは思いもしなかったのお」

「確かに、あの時の明久の食事は酷かった」 「確かに、あの時は僕も妹を悪魔と思ったよ」

「あ、あの一体どんな食事の献立だったんですか？」 「そ、そうよね。あんた達がそこまで言うなんてちょっと知ってみたいし」

「簡単ですよ。乾パン一個と魚肉ソーセージ一本半をただ薄造りにしただけです。後水と塩と砂糖をつけただけです」

そう言った瞬間瑞樹ちゃんも島田さんも声を出しませんでした。そしてお兄ちゃんに同情してくれる目を向けてくれました。

お兄ちゃんに至っては『や、やめて。そんな目で僕を見ないで』と言っています。

「まあ、そのおかげでお兄ちゃんの成績は上昇しましたから。後何本かゲームや本も売って勉強に対する意欲も高めましたからね」

「僕はあのかきほど桃香を悪魔に思えてならなかったよ。まあ今はそんな事をした意味を知ったけれど、それでもあの時は苦労したよ」

そう言い合いながら私達は食事をしました。途中で瑞樹ちゃんがお兄ちゃんに『お弁当を作ってあげます』と言ったのですが、私が見た瑞樹ちゃんの料理に合格点を挙げられないので作らないようにしておいてもらいました。

お兄ちゃんも瑞樹ちゃんの料理がどれだけの物か知っていたので、

少し顔を青くしていましたしね。

「おい、何で姫路が弁当を作っちゃいけないんだ？」

「瑞樹ちゃんは食材に薬品を入れるんですよ。そのせいで作った料理に危険物質が発生して食べられないんです」

「うう、そのたびに桃香ちゃんにお仕置きされたんですよ。正座させられて怒られり色々。三時間も正座させられたこともありましてし」

「まあ、桃香は料理に関しては絶対に妥協しないからね。僕も最初姫路さんの料理を知らなくて危ない目にあつたからね」

そう言つてこの手の話は終わりました。そして同時に私達の食事も終わっていたので、坂本君が戦争に関しての話をしてきました。

そして何故私達の上のクラスであるEクラスでなくDクラスを攻めるのかという点になりましたが、坂本君がEクラスは攻めるに値しないクラスだといったのですが、誰も意味が解っていなかったので、私が答えました。

「簡単に言えば、この場にいるメンバーだけで大丈夫だからです。

お兄ちゃんに瑞樹ちゃんはAクラス並、私はあの霧島さんすら超える点数保持者。後ここに在る皆も、選択されている科目と点数さえしつかりしていればDクラスは余裕です。

それに瑞樹ちゃんに問題がない以上、瑞樹ちゃんの補給試験の時間さえ稼げば後は簡単に落とせますね」

「まあそんなところだ。桃香はうちのクラスの切り札だしな。それに初陣である以上まずはDクラスを落として景氣をつける。

これもAクラスを打倒するために俺が考えている作戦に必要なプロセスだからな。それにだ、俺達のクラスは、最強だ」

最後の部分の言葉にこの場にいる皆が納得してしまいます。坂本君の言うように打倒Aクラスという、最下位であるFクラスが最高位のAクラスを倒せるという夢を持たせてくれそうでした。

そして私達は教室に戻って行き、私はお兄ちゃんと瑞樹ちゃんと一緒に補給試験に行きました。

ただお兄ちゃんは少しでも試験を受けてすぐに戦場に行くようにしてもらいました。相手はDクラスなので、最低でも150あれば余裕だからです。

そして私達が始めた今学期最初の試験召喚獣戦争が始まったのです。

第四話（後書き）

明久は姫路の料理を食べたことがあります。

ちなみに姫路の料理は桃香のおかげで普通に食べられるようには改善しています。

第五話（前書き）

遅くなつてすみませんでした。

第五話

私と瑞樹ちゃんは未だに回復試験の真っ最中ですが、お兄ちゃんは実はもう戦争に参加しています。

簡単に言えばお兄ちゃんには0点扱いの科目が3つあったのでそれを2・3枚のテストの回答で回復しただけで、後の科目はFクラスに入れるように調整していたので、すぐに戦線に行けるからです。

私達二人が頑張ればいいのですが、私は今回の戦争には不参加にするつもりなので、次の試験召喚戦争用にAクラス上位を狙っています。今回の戦争では瑞樹ちゃんが最後を勤めるそうです。

後私達は入ってから何も言わずにテストの数をこなしていますが、瑞樹ちゃんの回復が間にあって勝つか、間に合わずに負けてしまうかの二つなので、瑞樹ちゃんも頑張っています。

「（お兄ちゃん頑張ってね。もしも勝ったら夕ご飯は少し豪勢にしてあげなきゃいけないな）」

そう思いながら私は回復試験を受けていきました。同時に回復科目の点数も、指輪を装備できるような点数で、しかも思いつきり何度も使用できるように調整しながらテスト用紙を何枚も消費していきましました。

明久 サイド

僕は簡単に回復試験をしてすぐさまDクラスとの交戦地域に入っていた。

途中で回復試験を受けに行く秀吉と出会ったので、戦場の空気を聞いてみたところ、戦死者はあの鉄人がいる『鬼の補習』を受けることが分かった。僕は簡単に今のこちらの現状を聞いて秀吉と別れた。

この学園の特色である試験召喚獣戦争は、総合科目は学年主任がいなければ出来ないが、それ以外の科目はその科目の担当の先生を呼び、その科目の召喚フィールドを形成してもらう必要がある。

召喚獣は一人一体持っていて、その召喚獣の強さは最近受けたテストの点数となるのだが、最近受けたのはクラス振り替え試験なので、それ以外は誰も受けていないので、振り分け試験の点数が今の召喚獣の強さになる。

そして召喚獣が消耗すると持っている点数が減っていき、そして召喚獣の点数が0点になると戦死扱いになる。

だが戦死していなければ後で回復試験を受けて点数を補充すれば何度でも戦闘に参加でき、戦死扱いになった生徒は戦争が終結するまでの間補習室で補習を受けるようになっていく。

また召喚戦争において相手が召喚して自分も召喚しなければ戦闘放棄とされて戦死扱いになり補習を受ける羽目になる。

召喚フィールドはフィールドを展開してくれた個人差はあるが半径10メートル程度なので、うまくいけば科目を変更することも出来る。

召喚獣戦争では戦うのは召喚獣であって召喚獣を出した本人ではないので、本人に攻撃を加えるのは違反行為である。

そしてこの召喚戦争の勝敗を決めるのはクラス代表を倒した方のクラスが勝ちというものだ。

ちなみにだが、戦場に近くになって鉄人の怒声が聞こえた。僕はそれを聞いて行くのを止めようかと思った。

何しろその鉄人の言った内容が怖いからだ。だって…

「戦死者は補習！！」 「ひい、鉄人！い、嫌だ！補習室は嫌だ！！！」

「黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ。終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

「い、嫌だ！あ、あ、あんな拷問耐えられるわけ無いじゃないか！！！」

「拷問？そんなことはしないぞ。これは立派な教育だ。補習が終わった頃には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕上げて上げてやる」

「い、嫌だ！！頼む誰でもから助けてくれ！！！！」

うん、聞こえてくる声のおかげで、戦争の雰囲気どのくらい恐ろしいのかが分かるよ。しかも桃香が僕にした拷問よりも精神的に効きそうだから気をつけないと僕も連れられていった人のようになるだろうからね。

僕が戦場につくと島田さんがDクラスの女子と召喚獣を召喚して戦っていたらしいのだが、島田さんの召喚獣は相手の召喚獣に首筋に剣を突きつけられているだけで0点になっていないうえに、何故か相手の女子に手を引かれて保健室に連れて行かれようとしていた。

「い、いや〜！誰でもいいから助けなさいよ〜！！」 「ふふ、さあお姉さま。この時間帯なら保健室のベットは開いてますわ」

そう言っただけで島田さんは補習室でなく保健室に連れて行かれそうになってたのだが、相手の女子（召喚獣に清水美春と名前が出ていた）が『邪魔をするなら許さない』というオーラを出していたので怖くて近づけなかったが、戦場に来る前に桃香から島田さんと言う貴重な戦力を最後まで失うわけにはいかないので、仕方ないので僕は出て行って彼女の相手をした。

「試獣^{サモン}召喚っ！」 「よ、吉井」 「なあ！」

科学 Fクラス 吉井明久 65 VS Dクラス 清水美春 41

未だに苦手な科学だけど、さっきまで島田さんと戦っていたらしい清水さんの召喚獣を僕は一撃で倒した。

ちなみに僕の召喚獣は改造制服に日本刀（鞘付）という装備で、今回は相当急いので点数も少なかったが仕方なかった。

そして清水さんは鉄人の肩に担がれて補習室に連れられて行った。

「よ、吉井あ、ありがとう」 「いや、島田さんがいなくなると大変だからね」 「え：そ、それって：」

「桃香にこっちに来る前に言われたんだ。現状で使える戦力は多分秀吉と島田さんだから、早い段階でどちらかか、両方を失うときつくなる上に、負けてしまう可能性が高くなるって言われたからね」

そう言った瞬間島田さんは落ち込んだようになったのだが、どうし

てだろうか？おまけに何かぶつぶつ言ってるし？

そして僕は島田さんに回復試験を受けるように言って、同じクラスの須川君と一緒に戦場をかけて行った。

だが、戦況はあまり変わりはいらなかった。

何しろ桃香が言った戦力である秀吉も島田さんも後方で回復試験で点数の補給をしていて、おまけに僕も元々0点扱いの3科目の点数を2・3枚のテストで補給しただけで、後の科目は桃香に言われて振り分け試験のときに細工してせいぜい70点以下位で統一させていたのだが、数と言う戦力的にきついのだ。

おまけに相手にも僕達が時間稼ぎをしていることがばれたので、相手も短期決着にしようとしてきたのだ。

「仕方ない。須川君偽の情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐために」

「偽情報？それは構わないがスグにばれるんじゃないか？Dクラスで前線を指揮してる塚本の声が大きいから混乱はすぐに収まるぞ」

そう、今Dクラスの前線を指揮している塚本君の声が大きいので、僕らにも指示が聞こえるので何とか対処できるが、この状況で僕達が『Dクラス』に偽情報を流したとしてもすぐに混乱は収まるのは目に見えているのだ。

「大丈夫。偽情報を流すのはDクラスじゃないから」 「というところ？」 「先生たちに流すんだ。他の場所に移動するように」

「なるほど。それなら効果的だ」 「でしょ？」 「ああ。流す偽情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみよう」

須川君はそう言って駆け足でこの場を離れていった。須川君はこういうのが好きなのか随分活き活きして見えた。

そして僕も前線に出ながらも皆に指揮をとりながら戦っていた。

しばらく拮抗した状態が続き、相手側から『船越先生を呼んでいる！』と言う僕達Fクラスには好ましくない会話が聞こえてきたのだ。船越先生を呼んだのは立会人になってもらうためであろうが、そうになると戦線を拡大させられて今以上にきつくなってしまう。

これ以上は僕のほうも観察処分者のデメリットであるフィールドバツクきているので、そろそろきついでどうしようかと思っていた。

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

校内放送で須川君の声が流れた。職員室にはDクラスの生徒がいると思い放送室に駆け込んでいるとは僕も思わなかった。

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出された相手は今話題に上がっていた船越先生だったので、これで大丈夫だと思った。

《吉井明久君が体育館の裏で待っています》

…あれ？ちょっと須川君？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話がつて、桃『ブツ』》

急に放送が遮断され、須川君が最後に『桃』と言ったのでまさかと思ったが、次の瞬間放送が再開された。

《失礼しました。船越先生、うちの兄は所用があつて行けませんので、代わりにうちのクラス代表の坂本雄二君が話があるそうです》

何故か今回復試験を受けているはずの桃香が放送していたが、今度は僕ではなく雄二が売られた。

実を言うところの船越先生、婚期を逃したせいで単位を盾に生徒に交際をするようにまでなった45歳の女教師である。

こうなると確実に船越先生は雄二が来るまで何時間も待っていそうである。

《Fクラスの皆さん、勝ったら明日とびっきり美味しい料理を持ってきてあげますから頑張ってください。Dクラスに負けたらありませんので、あしからず》

そう言った瞬間、僕の周りのFクラスの面々が吼えた。

『桃香さんの料理！！野郎共、Dクラスの奴らをぶっ殺すぞ！！』

『『『うおおおおおー！！！！』』』

実を言うと桃香の容姿がちんくしゃであるが、料理は物凄い絶品なのだ。何しろ作った料理を袋等に包んでいても匂いだけで皆が釣られてしまい、おまけに味も絶品なので、鉄人や料理自慢の人ですら桃香の料理には太鼓判を押すのだ。

そのため鉄人が桃香の料理は『フオティオチャン仏跳牆』と言う中国料理でみたいだと言った事がある。

意味は『お坊さんが隣の垣根を越えて食べに行ってしまう程美味し

い料理』という意味だそうだ。ちなみに僕はその実物を食べたことは無い。

同時にこの瞬間雄二は誰にも心配されることすら無くなり、Dクラスでさえさっきの雄二の事の放送よりも桃香の料理の放送が痛かったらしく、戦線を巻き返さないように頑張ろうとしているのだが、Fクラスの気合が戦況を押し返していった。

第五話（後書き）

最後に出てきた料理名は『美味しんぼ』や『ジャン』で出てきた料理です。

実際は超高級中国料理のひとつで、色々な物を10時間近く煮込んだだけというものらしいのですが、相当高いらしいです。

それと桃香の料理設定は元にした原作『超少女明日香』のネタを使用しています。

次回Dクラス戦を終結させようと思います。

第六話（前書き）

遅くなりました。

Dクラス戦の終了とFクラスが変貌します

第六話

私はお兄ちゃんを売ろうとした須川君から、代表である坂本君の指示でしたと言ったので少しではありますがこれで報復は終了です。そして私は瑞樹ちゃんがいる教室に戻り、そして補給試験を再開しました。

そして瑞樹ちゃんと私が全ての補給試験を受けて終わったのはもう周りが夕方になり、そして瑞樹ちゃんはFクラスの皆が戦っている戦場に向かって行きました。

私は坂本君に当初から今回のDクラス戦では参戦する意思が無いことを言っているので私は自分の用件を済ませるために学園長室に向かつて行きました。

私は学園長室につき、扉をちゃんとノックし、部屋の中にいる学園長から入っていいという言葉聞いて部屋に入りました。

学園長室に来るのはこれで何度目なのか数えていませんので分かりませんが、一年の二学期後半からここに来ているので、何百回目かの入室になってきているので、学園長の顔も見飽きてきました。

学園長は皺くちやのお婆ちゃんで、そしてこの学園に使用されている特殊システムである『試験召喚獣システム』の開発者でもあります。

当初ここに来たときは何故かと思ってびくびくしましたが、知ってからはこの人に利用されてばかりなので、色々困ってもあります。

私がこの人から貰った称号は未だに一回も使用していませんが、それ以外ではこの学園で使用するかもしれない最新技術を私は起動実

験テストの名目で使用し、そして実験結果のデータを使ってさらに新しい技術を作り出すための実験動物扱いなのが少し嫌ですけど。

「あんたかい。今日のはあんたに対しての用事は無いはずだけど、どうしたんだい？」

「学園長にお願いがあってまいりました」

「お願い？確かあんたは新学期早々から召喚戦争しているFクラスの一員だろ。こんなところに来て大丈夫なのかい？」

「その点をご心配無く。代表には今回の戦争には参加しないと断っていますし、負けるはず無いですよ、うちのクラスは」

「…そうかい。まあいい、で、お願いってのはなんだい？設備の変更なら了承しないよ」

この学園の設備が変更できないのは知っている。変更するのであれば、今やっている試験召喚戦争に勝てば設備の変更は認められるが、それ以外での設備変更は認められていないのも重々承知している。

「いえ、明日の朝4時くらいに学校に来て教室を掃除をするつもりなので、そのための許可を貰いに来ただけです。後支給されている座布団は大半綿が無いのでそれを込めるくらいのもんですが、大丈夫でしょうか」

「朝の4時から学校に来て掃除ね。…まあいいよ。どうせ自分のいるクラスの掃除だろ。綺麗にしておきな。座布団の綿のほうもいいだろう。新品にとかえるわけじゃないんだし許可してやるよ」

「分かりました。そのかわり教室が綺麗過ぎになっても、学園長、文句は言わないでくださいよ」

「はん、あんたが今いるFクラスの教室が掃除をしたせいで綺麗過ぎって事は無いね。それにたかが掃除した位で文句なんてものは言わないよ」

これで言質は取れました。何しろ久々に『本気』で掃除をするのです。後々文句を言われては仕方ありません。それにこの学園の最高責任者である学園長からの言質を取ったのですから、誰も文句は言わないはずですね。

「用件はそれだけです。これで失礼します。後掃除をする件に関しては先生方にも言っておいて下さい。明日早く来たさいに何か言われるのも嫌なので、お願いしますね」

「はいはい。まあたしかにそんな朝早くから掃除されるのを知ったら先生達も何を言うか分からないからね。当直の人間にもちゃんと言っておくよ」

「それじゃ、失礼しました」

そう言って私は学園長室を後にしました。そして同時に私は校庭からFクラスの勝利の勝ち鬨を聞いたのでした。

学園長は次の日、この桃香による『掃除』を許可したのを物凄く後悔し、そして掃除などに関して『吉井桃香』には、あらゆる行事の参加や手伝いを在学中しない事を校内に掲示するのは、また別の話であった。

私は一度クラスに戻り、自分のカバンを持って帰りました。おまけにですがお兄ちゃんのも一緒にです。

そして帰り道ではお兄ちゃんと一緒に買い物をしてから家に帰っているのですが、帰り道の話は今日の試験召喚戦争の勝利の話で持ちきりになりました。

「それにしてもお兄ちゃん達もよかったね」 「うん、それにしても桃香は大丈夫なの？ あんなこと言ってさ」

「大丈夫ですよ。それと明日は早めに学校に行くので、私はお兄ちゃんを置いて学校に行きますね」

「うわー、気をつけておくよ。桃香も気をつけてね」 「はい」

そう話をしながら私達は家に到着し、そして今日はお兄ちゃんが晩御飯を作ってくれました。

そして私は朝早くからクッキーを焼き、そしてお兄ちゃんの弁当と朝ごはんを作って私は家を出ました。

明久 サイド

僕は桃香が今日は学校を掃除すると言っていたのにも関わらず寝過ぎしかけ、何とか桃香が作った朝ごはんを食べ、そして弁当を持って学校に向かった。

何とか僕は遅刻しないで登校出来たのだが、教室に入れなかった。正確には、昨日見たFクラスの教室の外とは思えなかったからだ。

昨日見たFクラスの外の部分の感じと言えば、木造でしかも掲げてあるFクラスの看板すらボロボロのものだった。

簡単に言えばコンクリートの建物の中に木造のボロボロの空き家があるような物だったと言える。

だがだ、今日の前にあるのはそうではない。

Fクラスと書かれた看板は新品のような感じで、そして外の部分の様子もまるで今建てたような新築の感じになっているのだ。

そして意を決して教室の中に入ると、そこには昨日見たボロボロの廃屋がこれでもかと言うくらいに綺麗に消えていた。

ボロボロでカビの生えた畳は新品に、そして隙間風が吹いていた壁も綺麗な物になり、そして僕達の机でもあるちゃぶ台も全て新品のような感じになっているのだ。おまけに綿が無かった座布団にも全てに綿が入っているのが分かるくらい膨らんでいた。

簡単に言って昨日までの廃屋がたった一日で今建てたばかりの新品の建物に変化しているのだ。

「どうなってるんだ、これ？」 「おい、明久」 「あ、雄二」

僕は教室の扉の前で啞然としていたのだが、雄二に言われて意識を此方に取り戻した。それほどこのFクラスの教室は変貌しているのだ。

そして僕は雄二に言われてこの変貌の原因が誰かすぐに分かった。何しろこんな真似が出来るのはたった一人しかいないからだ。

「おい明久、どうなってんだよこれは？昨日と今日で教室が変貌し

ちまってるぞ。おまけにだが聞いた話だと俺達が昨日戦ったDクラスと、最終目標であるAクラスの教室もこれでもかって位に綺麗になっちまってるらしいぞ。おまけに教室がこんな風になったんで先生が一時間目は自習になるって、俺が来たときに教えられたけど、どうなってんだよこれは？」

「多分この変貌振りを考えると僕の知っている限りじゃ一人しかないからね」「何！誰だよそれは！！」

「先に雄二悪いんだけど席に座っていいかな。いくらなんでもここで話ってのは不味いかも知れないからね」

そう言っ僕は自分の席に座った。隣にいる姫路さんも教室のあまりの変貌振りに驚いているようだけど、これをした人物の事を聞いたらもっと驚くだろうなと思った。そして僕が自分の席に来たと同時に雄二が僕の近くにやって来た。

それと同時に秀吉、ムツツリーニ、島田さんが近くにやって来た。

桃香は後でゆっくりと座っている。

「さて明久、一体全体誰が教室をこんなにしたんだ」「それは『私がしたんですよ』桃香」

僕の後ろにいる桃香がそう言った。そう家族である僕が知っている桃香のもつ以上ともいえる掃除などの家事能力には誰もかなわないと言えるものなのだ。

昔からあったわけではないが、桃香は体の調子がよくなってからは家事能力が以上になっているので、可能性があったのだが、まさかこれほどとは僕も思わなかったのだ。

「おい桃香お前がこれ全てをやったのか？」「そうですよ。早起

きして掃除したかがありました」

掃除ただけでここまで綺麗になるなら、清掃業者とかいらんんじゃないんじやと思うがそこは桃香の異常な掃除能力のおかげでスルーしてもらう。

そして桃香もここまでしてしまったのだから、後々の行事等で清掃業務は禁止されるかもとこぼしたが、それは僕達全員が納得した。

そして僕達はお昼休みまでこの異常なまで綺麗になったFクラスの教室で勉強をしたのだが、昨日の教室環境よりもいいのだが、雄二が一時間目が自習なので、この状況をどうにかするために一時間目の時間をフルに活用して彼が考えている明日の試験召喚戦争の士気向上を目指して頑張った。

明久 サイド エンド

第六話（後書き）

元にしてある原作『超少女明日香』の異常な掃除能力はどうでしたでしょうか？

原作でも大きな家の草木がぼうぼうに伸びている庭園をわずか15秒フラットで綺麗な庭園に早代わりさせ、ボロボロの家が今立て直したような感じにするなんて事は当たり前だったので、了承してください。

おまけにですが、元にした原作の主人公砂姫明日香は従業員があまりにもいなくなったホテルをたった一人で全ての業務をした描写があります。

レストランでの料理に料理出し、料理にいたってはウェイターの一部が客から太鼓判を押され、ベトナムメイクングは一発で完了してすぐに次の部屋に行き、結果数部屋を完了させ、予約できていた団体客をホテルに宿泊できるようにし、さらにホテルの予約まで終わらせたのです。

そして主人公の明日香を好きになった青年がホテルに帰るとゴミも無く、しかも太陽の光に反射するほど玄関ロビーが光っている始末で、ホテルの支配人が泣きながら『このホテルの一日の業務をたった一人で終わらせて、ニコニコと笑って帰っていかれました』と言わせたほどです。

そしてその青年が借りている別荘に帰った時には笑ってお出迎えしたほどの人物です。

それとですが、もしも家のところの『吉井桃香』をバカテスを書い

ている作者さんで使いたい方がいれば、使ってくれても結構です。
その代わりですが、外伝でもいいので上のような元にした描写とは
行かなくても、それに近いくらい物をお願いします。

第七話（前書き）

遅くなつてすみません。ではどうぞ

第七話

Fクラスが綺麗になりすぎたので、一時間目は自習になりましたが、二時間目からは普通に授業となりました。

昨日の事件で坂本君を陥れるつもりはなかったのですが、船越越先生と会った時に近所の独身のお兄さんを紹介しておきました。それを聞いた坂本君も息をついて安心していましたが・・・。

そして二時間目が終わって先生と入れ替わりにミックが私達の前にやって来ました。

ちなみにいつものメンバーが揃っています。

「どうしたのミック？何か用事」　コクッ

そう言って二本足になって手振りと言き声で色々言ってきました。

「何なのいったい？」　ミイミイ、ミイ　「ふむふむ」　ミイ　「え、それほんと？」　コクッ

「お兄ちゃん、どう思う？」　「うーん、ミック、相手のほうは分かるの？」　フルフル

「それじゃ次の休み時間かお昼休みまでに相手のこと調べてね」
「頼んだよミック」　コクコク

そう私達が言ってミックは扉まで行って、二本足で立って扉を開け、そしてそのまま歩いて行きました。

「うゝん、お兄ちゃ『ちょっと待てゝ!!』何ですか坂本君？」
「そうだよ雄二？何さ一体？」

「可笑しいだろお前ら!!まるであの猫の言葉が分かるみたいだし、おまけに何で猫が二本足で立って、しかも教室の扉を開けて出て行ったんだぞ。ちょっとは可笑しいと思え!!」

「そんな事言われてもね？」 「元々ミックは私達の猫ですし」

「「家にいた時もあんなのでしたし（だったしね）」」

「おいゝ!!俺だけか、俺だけなのか!!この状況を可笑しいと思うのは俺だけなのかゝ!!」

坂本君が絶叫しますが、秀吉君と土屋君が坂本君の肩に手を置いて坂本君を宥めました。

「雄二よ、一々そんな事に突っ込んでいたらこっちの身体が持たんぞ」 「…その通り」

「ちくしょゝ!!俺に味方はいないのかゝ!!」

何とかして坂本君を宥めて、私とお兄ちゃんはミックから聞いた情報をどうしようかと迷っていました。

「（けどミックのあの情報どう思う、お兄ちゃん?）」 「（そうだよね。相手はあの根本だしね）」

ミックがもつと来た情報は『あの根本^{ねもと} 恭二^{きやうじ}』が誰かは不明ですが女子からお弁当を貰っていたという情報だったのです。

ちなみにですがこの根本恭二は卑怯な手段を平気で使うという人間で、『喧嘩では刃物は普通に所持』や『カンニングは当たり前』など等、良い噂は何一つも無い人間ですので、そのため私達の行き着いた考えは同じでした。

「（脅迫されて造らされている可能性が高いですね（ね）」

そう思っても、相手の女子生徒が分からないので、坂本君に言う事はしないでそのまま私達だけの今の所の秘密にしておきました。

ちなみにですが、お兄ちゃんもミックの声が分かりますし、私の能力の事も知っています。ちなみに私が秘密にしていた能力がばれた時、同時に西村先生（通称鉄人）にもばれてしまったので、西村先生もミックの言っている事は少しですが分かるようになってしまいました。

おまけに、お兄ちゃんにばれた時は、場所が場所だったので、その・・・言えません。

そして三時間目が終わった休み時間にミックがやってきました。そして私達は相手の女子生徒と理由を知ったのですが：

「（お兄ちゃんこの人もしかして…）」 「（可哀想だね。根本みたいな奴を）」

「（恋人にするなんて（って）」

相手はCクラスのクラス代表で名前は小山^{こやま} 友香^{ゆうか}、しかも根本の恋

人だと分かりましたが、まさかあの根本を恋人にするなんて、相手の人は相当な馬鹿か、もしくは精神的に可笑しいのではと思ってしまいました。

おまけに言うとは根本君はBクラスのクラス代表らしいのですが、卑怯な手段を使用してのクラス代表だろうと思いましたが、

ですがこれはこれで結構使えますので、私はすぐさま坂本君に報告しました。ちなみにミックはもう帰っています。

「坂本君、ミックからの情報なんですけど」 「ああ、どうしたんだ」

「根本君に恋人がいるそうです」

「「「何〜!!!!」」」」

Fクラスの男子生徒の大半が大声を上げて唸りました。おまけに『あの根本にだ』だとか『恋人だと、許すまじ』など等、色々と声が上がっています。

「それで、他には？」

「はい。根本君はBクラス代表で、相手はCクラス代表の小山友香さんです。おまけにお弁当も造ってもらっている関係です」

そう私が言った瞬間、周りのFクラスの皆が歴史の教科書に掲載されてあった『KKK』クー・クラックス・クラン見たいな格好になっていました。流石の私もこれには驚きました。ちなみに言うとは坂本君も少し引いていました。

「代表、我々異端審問会FFF団が、根本恭二に罰を与えたいのだ

が、いいか？」

「あ、ああ。出来れば試召戦争になるようにしてくれ」 「分かった」

そう言ってFクラスのメンバーの大半が消えてしまいました。

「え、えっと、これは一体」 「俺もわかりたくないな」

その後どこからとも無く悲鳴が聞こえましたが、気のせいだと思うことにしました。

第七話（後書き）

文句は聞きません。超少女明日香をモチーフにしているのでミツクの設定は間違いではありません。

それと根本ですが、番外編か何かで良いでしょう。

第八話（前書き）

話部分が多いので少し読みにくいかもしれません。
次回はAクラスとの交渉にしようかと思っています。

第八話

F F F団が取り付けた今日の昼休みからのBクラスでの戦いでしたが、あっさりと済んでしまいました。

というのも、戦争開始時間になったいうのに、Bクラスからは防衛に出てくるような方々は一切おらず、そのままBクラスに進入し、そして本来なら根本君を守るはずの近衛部隊すらない状況で、結果Fクラスメンバー全員とBクラス代表根本君のみというある意味リンチに近い方法で倒したからです。

ちなみにですが、このBクラスに入ったときの根本君は椅子に縄で雁字搦めに縛られており、他のみんなは白旗を揚げていました。

ちなみに参戦したのはF F F団のメンバーのみで、他の人間（私、お兄ちゃん、瑞希ちゃん、坂本君等ですが）は一切戦闘参加すらせずに終わりました。

私は不思議に思っただけ近くにいたBクラスの生徒に聞いたところ

「根本の指揮で動くのなんて嫌だ。それに宣戦布告の際俺達全員を売りやがったからな。だから誰もこいつの命令に従わなかったんだ。まあ俺達もこのゴミを始末してくれて有難いくらいだな」

というわけらしく、結果的にBクラスの大半の生徒と誰一人とも戦わずに私達は勝利を得ました。

その後嬉しはずかし敗北者の扱いに關してですが、坂本君が根本君にこの学校の女子の制服（なぜ持っていたかは不明ですが）を着用して、Aクラスに宣戦布告のみしてくるように言いましたが、本人は嫌がりましたが、他のBクラスのメンバーが賛成し、結果

女装して宣戦布告のみいくはめになりました。

ちなみにAクラスへの申告が終わったその後は根本君の女装姿の写真会があるということで、土屋君が指揮の元やったそうです。

まあもしもそんな写真が出回ったら、私は吐き気を起こしそうなので、絶対に見たくありませんが…。

そして次の日。

私達は昨日の戦争で（とは言っても参加していない私達は別で前回よりも持っている点数の上昇をですが）消耗した点数の補給を済ませ、私達は（ミックも一緒に）昼休みに屋上でお昼を食べ終え、私は坂本君にAクラスとの戦い方を聞くことにしました。

「それは簡単だ。Aクラスとの戦いは一騎打ちに持ち込むつもりだ」
「一騎打ちにですか？」

「ああ、そうだ。何しろ俺達Fクラスがどう頑張ってもAクラスには勝てないからな」

「ちょ、ちょっと雄二それじゃ『確かにそうですね』って桃香!!」

「仕方ありませんよ。Fクラスの大半の生徒のもつ点数を考えてもAクラスの生徒には勝てません。結果的に今ここにいる私達が主力になります、それでも選択されている科目によります。ですが、もしも坂本君の戦い方が通ったとしても、Aクラスも考えるでしょうから対戦方法は5対5、もしくは7対7のような科目選択型の戦いになると思います。そうなった場合、私達の大将である坂本君が、絶対にAクラス代表の霧島さんを倒せる科目が必要になります」

「確かに…」 「うむ、桃香の言うとおり、わし等が勝ったとしても状況によれば雄二が勝てなければ意味が無いの」

「確かにそうよね」 「ねえ雄二、絶対に勝てるって言う自信はあるの？」

「それなら問題ない。俺が翔子に勝てる科目はたった一つだけだがある。だからそれに限定して翔子を倒す」

「?? あの坂本君、何で『翔子』って呼び捨てなんですか? 私もあり霧島さんと接点が無いのでそうよんでるのに?」

「簡単だ。俺とあいつは幼馴染だ」

それを聴いた瞬間、この場にいた皆が啞然としました。ですが別の意味で坂本君も良かったですね。何しろこの場にいる土屋君から他のFFF団の方に言わなければ一応怪我とかをすることは無いはずですので。そして私達は坂本君に霧島さんを倒せる科目を聞きました。

「それは日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。ただし召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とするんだ」

「ってことは一問でも間違えたら終わりのサドンデス方式になりますね。けれどそれで勝てるんですか?」

「大丈夫だ。翔子が絶対に間違える問題がある。それが出れば勝てる。その問題は、大化の改新だ」

「坂本君の言いようだと、年号ですね」

「ああその通りだ。あいつは一度覚えたことを忘れないからな。昔俺が嘘を教えた。だから絶対にこの問題は間違える」

ですがそれを聞いても私にある不安は消えませんが、何しろ本人がここまで勝てると言っているのですから確認のつもりでする事にしました。

「でしたら坂本君、私がお兄ちゃんに出している問題集を渡しますから、それで満点を取ってくれますか？」

「おいおい、まさか明久のやっている問題集は小学生クラスの問題ばっか集めてるのか？」 「って、桃香そうなの？」

「いえ、ただ予習復習は大事ですし、それにお兄ちゃんにはある意味ボーナス問題的なものを持っているだけです。ですからそれを坂本君に渡して、その点数で決めるんです。そうすれば私も不安が消えますし」

「ふ、だったらそのお前が持っている不安ってやつも消してやるぜ」
「分かりました。確か次の授業は自習ですし、その時でいいですね」

そう言って私達は教室に戻り、私は坂本君に今日のこの時間にお兄ちゃんにやってもらおう問題集を渡しました。

そして授業終了と同時に預かり、そして放課後皆残ってもらい坂本君の点数を採点したのですが……。

「坂本君幾らなんでもこの点数は無いんじゃないでしょうか？」

「雄二なんだよの点数!!」 「・・・最悪」

「あれだけ霧島に勝てると言っておいてこの点数はないじゃろう雄二」 「ちよつと坂本どうすんのよ」 「あの坂本君、さすがにこれは、ちよつと」

「わかってるよ。小学生レベルだと思って甘く見てたのもあるが、まさか俺の本気を出してこれだけとは思わなかったんだよ!!」

何しろ坂本君が出した問題集の点数は『坂本 雄二 40点』だったからです。

これではAクラスに勝つどころか、Fクラスの設備が今以上に最低になりそうでどうしようかと思ってしまいました。

第八話（後書き）

昼休みを終えての授業が自習なのは作者の勝手です。実際何があるかわかりませんので、戦争終了後の次の日は自習かなと思ったからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844s/>

バカとテストと召喚獣 明久の妹は大自然の友

2011年11月11日16時26分発行